



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

279673

I313. 45
J2037/2-20

昭和二十八年五月十五日
昭和二十八年五月十日
発行 印刷

(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第二十巻)

定価 三百八十円

送料 三十円

著作権者 中里 幸作

発行者 中里 幸作

東京都品川区南品川五ノ一三

印刷者 森 高 繁 雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式会社 彩光社

電話 神田二二三六四番
振替 東京一九三九七六番

大
菩
薩
峠

第
二
十
卷

目次

椰子林の巻……………五

あとがき……………梁取三義…四二

題

裝

口

字

畫

繪

道

橫

代

重

山

田

信

大

收

教

觀

一

編

纂

梁 寺

取 島

三 枉

義 史

四十一 椰子林の巻

一

今日のこはるびより小春日和、山科の光仙林から、逆三位一體ぎやくさんみが宇治醍醐うちたいごの方に向つて、わたましがありません。逆三位一體とは何ぞ。

信仰しんこうと正義せいぎと懷疑くわいぎとが、袖をつらねて行くことであります。本來は、先づ懷疑があつて、次に正義が見出され、最後に信仰に到達するといふのが順序でありますけれども、こゝではそれが逆になつて懷疑が本體になつて、正義と信仰とが脇侍けふじであり、もしくは従者の地位しか與へられてゐない、といふところが逆三位一體と、かりに名づけたもので、三つ一緒に歩いてゐるから三位みの觀を呈するまでの事、内心に於ては必らずしも一體でなく、また一體ならんと豫期してもゐない。

信仰が先づ正義を呼んでいひました。

「ねえ、友さんとも、しつかりしなくつちやいけないよ」

「うん」

こゝで、先づ信仰と正義との受け渡しがありました。

女が先づ口を開いて、男がこれに應じたこと古事記の本文と變りはありません。だが、ここでは卷直しにならないで、女の方が飽まで押しが強い。

「お前といふ人は正直は正直なんだが、信心しんじんごろといふものがありません、人間、正直はいゝけれども、正直ばかりぢや世に立てないよ、信心だね、人間の事は神様佛様がお見通しなんだから、神様佛様を御信心をしてそれからの話なんですよ、今日はお前、お嬢様が御信心ごろでお出になるんだから」

こゝまで、教訓した信仰の鼓吹者は別人ならず、江戸の兩國の女輕業の親方お角さんなのです、お角さんはあれで信心者だから、假りに三昧一體の信仰の一柱はしらに見立てゝ見たまでの事で、その神妙な指令の受け方になつてゐるのが即ち宇治山田の米友なのであります。宇治山田の米友は正義の權化もんげです、そこで、これを三位一體の一柱と見立てたが、信仰の申し渡しに反對して、正義は敢て主張を試みないでゐると、懷疑が代つて徐ろに、それをあしらひかけました。

「わたしは信心者しんじんではありません」

と先づ、おごそかに否定をしたのは、逆三位の本體たる懷疑者の聲明としては至當の聲明

であります。

「わたしは、神様も佛様も信じません、では何を信するかといへば、まあ自分を信ずるといふ外はないでせう、だが、その自分も信じきれないのでね、何を信じていゝかわからないですよ」

覆面をして、背^せだけのすらりとした美人、姿だけを見ていふ、お銀様です、否定された信仰者は敢て動搖もしないで、直々に受取つて、

「わからないでする信心が本當の信心で、わかつてする信心は本當の信心ぢやないつて、傳道師さんがおつしやいました」

「そんな事があるのですか」

信仰者が、逆らはずに補綴を加へようとするのを懷疑者は立どころにハネ飛ばして、

「そんな馬鹿な事があるのですか、わからないで何の信心が出来ますか、物の道理がわかつて、はじめて信心をする氣になるのでせう、わからないものを信ぜよといつて、信ずることが出来ますか」

「いゝえ、お嬢様、そのところが……そのところが、その何なんです……」

何か相當の據りどころはあるらしいが、口の上ではつきりと補ふことが出来ない、そこに信仰者の悶えもたがありました、ハネ飛ばされてもしよげもしないし、反撥はんばうもしないところに信仰に於ける相當の自信があることは、あると受け取れるのですが、さて、立どころにその反撥に應酬して、相手を取つて押へるだけの論鋒が見出せない、その悶えを却つて懷疑者が補つてやるといふ逆三位、

「いゝんですよ、親方のは親方のでいゝんですよ、お前さんは信心者なんだから、それでいゝのよ、鰯いわしの頭あたまも信心からつていふでせう、それは輕蔑していふんちやありませんよ、鰯の頭をでさへ信じきれる人が結局エライんです、鰯の頭をでさへ信じ得られる人が、人間を信じなくてどうするのですか、人間を信じ得られる人は、神をも佛をも信じ得られる人なんです、それは幸福です、偉大でさへあるんです、ところが、わたしと來た日には何者をも信じ得られません、悲慘ですね」

こゝに至つて、女輕業の親方はグウの音か出ませんでした。相手から逆十字がらみに押へ込まれたのですから、抗辯の仕様もなく、さりとて納得しきるには頭が足りない、かうして女輕業の親方はいつもこの暴女王ばかりが苦手くがてなので

成るほど、お角さんといふ人は、信心者は信心者に相違ないけれども、その信心たるや餘りに廣汎にして色盲に近く、その祈念たるや餘りに現實的にして、取引に近いだけのものです。それは熱田神宮へ參詣して、そつと茶店の女中に耳打ちして、「この神様は何に利く神様なの」とたづねて女中を面喰はしたことでもわかります。ドコの荒神様を信心すれば金談がまとまるとか、ドコの聖天様は縁結びにあらたかだといふことは、江戸府内ならば大抵は暗記してゐて、各々、その時と事件に合せることを心得ての信心ですから、いはば、神佛に信心を捧げて置いて、それからお釣を取らうといふ信心なのです。さうかといつて、その信心を捧げた神様佛様がお釣をくれないからといつて、それを怨むやうなことは微塵もなく、それは丁度この時分に、神様が御不在であつたり、さらずば自分の信心の仕方足りないところがある。己の信心の誠意は自ら疑ふことはないが、その作法に何ぞ神様佛様のお氣に召さない事があつて、それでお聞き入れにならないから信心が届かない、かう信じてゐるのだから、反つて己を直くすといふわけで、この點では、やはり功利以上に超越した信心者の名を許して、さしつかへがないといはなければなりません。

かくて、この三位一體は、山科から醍醐^{だいが}への道を、小春日を一ぱいに浴びて、悠々寛々と下るのであります。道は勾配になつてゐるわけではないが、さながら満帆の春風を負ふて、長江に柔鱸^{じやうろ}をやるやうな氣分の下に、醍醐へ下るのであります。

お角さんは、稱して、お嬢様は御信心の爲に醍醐へ行らつしやるのだといふ、御當人はそれを排して、わたしが醍醐へ行くのは信心の爲ではありませんといひきつたが、それでは信仰以外の何の目的を以て行くのか、それはいひません。さりとて、今は、その時でないから醍醐までお花見といつてもそれは成立ちません。單純に散歩の氣分ならば、何も特に醍醐を指定する理由もなからうと思はれるけれども、それを問ひたゞす事をしないのが、お角さんの氣象^{きしやう}でもあり、信心者の大らかさでもあり、且つまた、この暴女王をあしらひの勘所^{かんどころ}でもあると思ひますから、お角は敢てそれ以上には押すことなく、また押すべき必要もないと口をつぐみます。

併し、本來をいへばお銀様の醍醐をたづねる目的は、三寶院の庭と繪とを見んが爲であり

ました。

それを、そゝのかしたのは不破の關守氏でありまして、關守氏は、つい昨晚、お銀様に向つて、こんな事をいひました。

「醍醐の三寶院へ參詣してごらんなさいませ、あそこの庭が名作でございます、併し、庭よりも尙ほ、その道の人を驚かすのは、國寶の繪畫彫刻でございます、その繪畫の數々あるうちに、殊に異彩を極めたのは大元帥明王の大畫像でございます、大元帥と書きましても帥の字は讀ますたゞ大元明王と訓むのが宗教の方の作法でございますが、あの大畫像はいつの頃何者によつて描かれたものか存じませんが、いづれは一千年以前のものでございませう、幅面ふくめんの廣大なること、圖柄つむぎの奇抜なること、彩色のけんらんなること、いづれも眼を驚かさぬはありません、但し眼を驚かす爲に描かれたのではなく、密教の秘法を修する一大要具として描かれたものに相違ございませんが、繪そのものが、たしかに素人をも玄人をも驚かさずには置きません、實に目ざましいグロテスクを描いたものです、大元帥明王——そのいかにグロテスクであるかは一見しないものにはわかりません、宗教的にはなか／＼以て神秘幽玄なる見方もあるに相違ございませんが、これを單に藝術的に見て

ですな、藝術的に見て實に筆致といひ、墨色といひ彩色といひ、全體の表現といひ、すばらしいものです、殊にその彩色が——彩色のうち人目を奪ふ紅と朱の色が大したものです、何しろ千年以上前の作といふにかゝはらず、朱の色が昨日、硯を發したばかりの色なんです、今時の代用の安繪具とは違ひます、繪かきが垂涎してをりますよ、こんな朱が欲しいものだ、ドコカラ來た、舶來？ 國產？ いかなる費用と勞力をかけても、それを取寄せて遣つて見たいとの心願を致しますけれど、あんな朱はドコで求めることも出來ません、科學者は研究をはじめましたが、今以て、あの原料が何物であるかわからんさうです、動物質か植物質かさへもわからないのだといふのですから——つまり、千年の昔に悠悠として使ひこなした顔料を千年後の今日の科學で解釋がつかないといふんですから、現代の科學も底の知れたものです、あれはぜひ一見の必要がありますな」

かういつて説き立てたものですから、お銀様がその明日といふ日に、この通り醍醐詣でとなつた始末であります、隨行に選ばれたのはお角と米友、これは不破の關守氏の當然の見立てもあり、本人達も納得したところであります。

山科から醍醐までは下り易い道です、歩き易い距離でした、道は平坦だが前にいふ通り、

流れに棹^ささして下る底の道であります、程なく、逆三位一體は醍醐三寶院の門前に著きました。

三

お銀様とお角さんが、三寶院のお庭拜見をしてゐる間、米友は門前の石橋の欄に腰打ちかけて休んでをりました。そこへ、六地藏の方から突然に、けつたいな男が現はれて、

「兄^{あに}い、洛北^{らくほく}の岩倉村^{いはくらむら}に大賭場^{おほばくだば}があるんだが、一つ、かついで行かねえか、いゝ錢^{ぜに}になるぜ」

と、一たい、簾から棒に、誰に向つて、こんな事をいひかけたのか、米友としても、ちよつと途方に暮れて、忙がはしく前後左右を見渡したけれども、自分の外に手持無沙汰である人つ子はないから、多分、このおいらといふ奴を目にかけて呼びかけたんだらうが、それにしちやあ、人を見損^{みそこな}つてゐるぜ。

「兄い、どうだ、行く氣あねえか、いゝ錢になるぜ、洛北^{らくほく}の岩倉村^{いはくらむら}に前代未聞^{ぜんだいみもん}の大賭場^{おほばくだば}があるんだから行かねえか」